死産を体験された患者さんから教えていただいたこと

A さんは切迫流産のため他院より搬送入院された方である。私は A さんと入院当日の夜勤で関わりを持った。A さんとその家族との関わりを通じ、助産師として家族への支援を改めて深く考えるきっかけをもらったと感じる。様々な家族の形はあるとは思うが、その家族にとっての必要な支援を適切にできるようになりたいと思った。

出勤してすぐ、私は入院患者が電話できるスペースの前を通り過ぎた。そこで大きな声を上げて流涙しながら電話している方がいた。申し合わせ時に、スタッフからその方が泣いている経緯を知った。A さんは軽い腹痛と出血で前医を時間外受診され、「日赤へいけば妊娠継続のための治療ができるからね」と軽く説明を受けて搬送入院されたそうだ。当院到着後のエコー検査では頚管長が計測困難なほど胎胞がせりでており、今晩中にも自然流産をしてもおかしくないという状態であった。

主治医からの病状説明の後、前医での説明と比べて差があり受け止めきれず、ずっと流涙されておりふさぎこんでいたようであった。ご主人も呆然とされており、ご夫婦で会話されることもなく一旦帰宅されていた。出勤してすぐに出会った A さんの流涙している姿を思い出すと、とても悲しい気持ちになり、もしも分娩になったら、なんて言えばよいのか、声をかけないままがよいのか悶々とした。

深夜帯、スタッフより、A さんが強い腹痛を訴えており、半狂乱となっているのでこのまま流産になるため処置室へ移動をしたい、と報告を受けた。A さんはベッドで処置室に入室され、陣痛の度に叫んでおり「無理無理、痛すぎて絶対動けない！」「なに？なんで痛いの？うそ、赤ちゃんでるの？いやだ！産みたくない！とめて！」と泣き叫んでいた。いつもなら、ベッド移乗の用意はこうしてこうしてと思い浮かぶのに、見ていてとても辛い気持ちになりなかなか準備がはかどらなかった。分娩の用意をしつつ、妊娠中の A さんの児に対する思いを考えた。主観かもしれないが、A さんにとって悲しい分娩ではあるけど、大事な赤ちゃんであることに変わりはなく、わけのわからないまま終わった分娩とするのは避けたいと思った。A さんに「怖いですよね…赤ちゃんは会いたいみたいです。横になって、一緒にお子さんを迎えませんか？」と何回か話しかけてみた。A さんは「やだやだ、それほんとなの？」と混乱している様子であったが、少しずつ現実を受け入れているように見えた。落ち着いた頃、医師と共に診察しようと下着を外すとすでに児頭と胎胞が見えていた。医師は「今回は残念ですが、お子さんの頭が見えてきている状態です。おそらくこのまま分娩になると思います」と話された。A さんは糸が切れたように静かになり、ただ流涙していた。しばらくして「赤ちゃんは苦しいでしょうか？」と A さんは私に聞いてきた。胎胞の中で児はまだ動いていたが、苦しそうには見えず、きれいな姿に見えた。「私から見て、赤ちゃんはとてもきれいなお顔をしていて苦しそうには見えませんよ」と伝えた。A さんは「そうですか」とつぶやいた。その後は話されることなく陣痛にあわせて静かに呼吸法をしていた。しばらくして静かに胎胞ごと児は娩出された。とてもきれいな顔をしていた児で、私は児と息を合わせてお産された A さんを労う思いも込めて、児の体が温かいうちに面会をしてもらいたいと思った。「お子さん、とてもかわいらしいお顔をしていてあたたかいですよ。お母さん、抱っこしてみませんか？」と声をかけた。A さんは「ママだよ、こっちにおいで」と手を伸ばしてくださった。涙を流していたがとても優しい表情で赤ちゃんを抱っこしていた。その後、ご主人も到着され、A さんの身体の状態を心配されると共に、愛おしそうに赤ちゃんを抱っこしてくださった。A さんご夫婦に付き添っていると、とてもこの妊娠を待ち望んでいたこと、産まれたらやってあげたいことリストがあったことなど話してくださった。時折ぽつぽつと、A さんが「ちゃんとしてあげられなくてごめんね、ごめんね」と児へ謝っていた。自責の念、悔しい思い、産声を聞けないこと、様々あると思うが、母として短い時間でもその子と関われたこと、家族として児を迎え入れた、という思いを少

しでも持っていただけるような関わりをしたいと強く思った。児の計測や更衣、写真撮影、足型や手型の作成を１つずつご夫婦の許可を得た上で実施した。涙や優しい表情が混じりつつ関わる事ができた。その後、Ａさんは帰室され、ご主人も帰宅された。

Ａさんご家族３人で撮られた写真を現像し、お渡しする用意をしている時に、Ａさんが赤ちゃんへ何回も謝っている姿が思い出され、家族になったことを私の主観で押しつけにならないようにしたいと思った。きちんと確認したつもりではいるけれど、今後、思い出すような物を渡すことは、かえって辛い気持ちにさせてしまうかもしれないからだ。そこで「この封筒には３人で撮られたお写真が入っています。色々な思いで気持ちが巡ると思います。お気持ちが落ち着いた頃、見ていただければと思います」と書いたメッセージで包んで写真をお渡しした。

Ａさんが退院されて１週間程経過した時、納棺の連絡をくださった。その際、私に納棺をしてもらいたい。と話されたそうで、もう一度お会いすることができた。とても疲れた表情をしていたが、口調はしっかりしていた。「どうしてもあの日の助産師さんと会って話したかった。どうしようもなく悪いことをしてしまったという気持ちは消えないけど、きれいな子ですね、お母さん、お父さんと呼んでくれて嬉しかった。この子はとても小さいけど、うちの子です。…産まれた後、夫が帰ってから赤ちゃんに会うのはとても怖かった…だから、写真や手型や足型にメッセージをつけてくれたこともありがたかったです。３人家族になれる時間を作ってくれてありがとうございました。」と話された。ご主人も「２人で今日、あの日にいてくれた方に話せたら一旦ふんぎりをつけよう、この子に会えた事を大事に生きようねって話したんです。」とおっしゃっていた。Ａさんご夫婦はこれから何回も分娩の日の事を思い出すであろう。それでも一緒に頑張ろう、と話されているご夫婦をみてほっとした気持ちになった。あの日の自分の関わり方が少しでも役に立てたのかなと感じた。

Ａさん夫婦に会えたことは私にとって忘れられない体験である。助産師は家族のはじまりの瞬間にいつだって関わる立場だ。それがどんな形や迎え方で始まろうとも、その人達なりの家族になっていこうとする部分に精一杯助力できるようにこれからも日々頑張ろうと思った。